

〈特集「ヴォイスとその周辺」〉

ポーランド語におけるヴォイスとその周辺¹ Voice and related matters in Polish

森田 耕司
Koji Morita

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

要旨：本稿は、特集「ヴォイスとその周辺」(『語学研究所論集』第17号, 2012, 東京外国語大学)に寄与するものである。本稿の目的は、40個のアンケート項目に対するポーランド語のデータを提供することである。

Abstract: This report contributes to the special cross-linguistic study on ‘Voice and related matters’ (*Journal of the Institute of Language Research* 17, 2012, Tokyo University of Foreign Studies). The purpose of this paper is to offer Polish data for the question of 40 phrases.

キーワード：ポーランド語, ヴォイス, 使役, 自動詞, 他動詞
Keywords: Polish, voice, causative, intransitive verb, transitive verb

『語学研究所論集』第17号の特集「ヴォイスとその周辺」に関する風間(2012)のまえがきに記されているアンケート項目及びその意図や説明に基づき、ポーランド語のデータを提示する。アンケート項目に回答し、必要に応じて、解説も加える。

(1a) (風などで) ドアが開いた。【自動詞と他動詞の対立】

Drzwi się otworzyły.
door-3PL.NOM REF open-3PL.PF.PST

(1b) (彼が) ドアを開けた。【自動詞と他動詞の対立】

Otworzył drzwi.
open-3SG.PF.PST door-3PL.ACC

(1c) (入口の) ドアが開けられた。【自動詞と他動詞の対立】

Drzwi zostały otwarte.
door-3PL.NOM become-3PL.PF.PST open-PASSP



本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ 表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

¹ ポーランド語のデータ作成に際してご協力いただいた本学特任講師カロリナ・レシニェフスカ先生に心よりお礼を申し上げます。

(1d) ドアが壊れた. 【自動詞と他動詞の対立】

Drzwi się zepsuły.
door-3PL.NOM REF break-3PL.PF.PST

(1a) 及び (1d) では、再帰代名詞 się を用いて自動詞表現を形成している。ポーランド語の再帰代名詞 się は他動詞に付いて、その動詞の示す動作が他の対象に及ばず、主語の領域にとどまるようにする、つまり他動詞を自動詞に変える機能を持っている。ポーランド語は、他のスラヴ諸語とは異なり、分析的な表現をとるため、例えば (1a) や (1d) のように再帰代名詞 się が文末に来る場合には、語順が変わり動詞の前に置かれる傾向にある。

(2) 私は (自分の) 弟を立てさせた. 【自動詞からの使役、他動詞からの使役】

Kazałem bratu wstać.
order-1SG.PF.PST brother-SG.DAT stand-PF.INF

(3) 私は (自分の) 弟に歌を歌わせた. 【自動詞からの使役、他動詞からの使役】

Kazałem bratu zaśpiewać piosenkę.
order-1SG.PF.PST brother-SG.DAT sing-PF.INF song-SG.ACC

(2) 及び (3) の例文については、どちらもポーランド語では「命じる」の意の動詞表現が用いられている。自動詞からの使役でも、他動詞からの使役でも、同じ動詞を用いている。なお、どちらも被使役者 (causee) は与格になっている。

(4a) (遊びたがっている子供に無理やり) 母は子供にパンを買いに行かせた. 【強制使役と許可使役】

Matka wysłała dziecko po chleb.
mother-SG send-3SG.PF.PST child-SG.ACC for-PREP bread-SG.ACC

(4b) (遊びに行きたがっているのを見て) 母は子供に遊びに行かせた. 【強制使役と許可使役】

Matka powiedziała dziecku, żeby szło się bawić.
mother-SG say-SG.PF.PST child-SG.DAT to-CONJN go-SG.IMP.F.PST REF play-IMP.F.INF

ポーランド語の場合、(4a) の例文では「送る、派遣する」、(4b) の例文では「言う」の意の動詞が用いられ、使役表現が現れなかった。ただし、(4a) の場合は強制使役にあたるため、(2) や (3) のように、「命じる」の意の動詞表現を使うことも可能である (例: Matka kazała dziecku iść po chleb.)。この場合、ニュートラルな強制・指示ではなく、明らかに被使役者 (causee) の意に反して強制するというニュアンスを明確に表現することになる点に注意する必要がある。状況にもよるが、ここでいう強制使役の例文としては、むしろこちらの方がふさわしいのかもしれない。

(5a) 私は弟に服を着せた。【他動詞による表現と使役の違い、直接の行為か間接の行為か】

Ubrałem brata.
dress-1SG.PF.PST brother-SG.ACC

(5b) 私は弟にその服を着させた。【他動詞による表現と使役の違い、直接の行為か間接の行為か】

Kazałem bratu założyć to ubranie.
order-1SG.PF.PST brother-SG.DAT put on-INF that-SG.ACC clothes-SG.ACC

(5a) のような他動詞による表現は直接の行為であり, (5b) のような使役による表現は命令などの間接的な指示行為であるので, 二つの表現に明確な区別があることがわかる。

(6) 私は弟にその本をあげた。【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Oddałem bratu tę książkę.
give-1SG.PF.PST brother-SG.DAT that-SG.ACC book-SG.ACC

(7a) 私は弟に本を読んであげた。【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Przeczytałem bratu książkę.
read-1SG.PF.PST brother-SG.DAT book-SG.ACC

(7b) 兄は私に本を読んでくれた。【(物の) 授受動詞は恩恵の授受においても助動詞的に使えるか】

Brat przeczytał mi książkę.
brother-SG.NOM read-3SG.PF.PST I-DAT book-SG.ACC

(7c) 私は母に髪を切ってもらった。【テモラウ】

Kazałem mamie obciąć włosy.
order-1SG.PF.PST mother-SG.DAT cut-PF.INF hair-PL.ACC

ポーランド語には, 日本語のような「やる」(授恩恵) と「くれる」(受恩恵) の区別はない。また「もらう」の場合, ポーランド語では使役表現を用いていることがわかる。

(8a) 私は (自分の) 体を洗った。【再帰】

Umyłem się.
wash-1SG.PF.PST REF

(8b) 私は手を洗った. 【再帰】

Umyłem ręce.
wash-1SG.PFPST hand-PL.ACC

(8c) 彼は (／その人は) 手を洗った. 【再帰】

On umył ręce.
he-NOM wash-3SG.PFPST hand-PL.ACC

ポーランド語では、自分の顔など身体全体を洗う行為に際して、再帰代名詞 *się* により自動詞化された再帰的な動詞表現が用いられ、それに対して特定の身体部位を洗う行為については、「手」や「顔」などの具体的な身体部位を指す名詞が目的語として用いられることが、例文 (8a) (8b) (8c) から読み取れる。

(9) 私は (自分のために) その本を買った. 【自利態】

Kupiłem sobie tę książkę.
buy-1SG.PFPST REF-DAT that-SG.ACC book-SG.ACC

ポーランド語の再帰代名詞 *siebie* の与格 *sobie* の特殊な用法の一つとして「自分用として、自分のために」の意味で用いられている典型的な文例である。ただし、自分の行為であることを明確化するための付加的な要素であり、必ずしも義務的な要素ではない。また文脈によっては「心ゆくばかり」「くつろいで」というようなニュアンスを持つこともある。つまり、例文 (9) の完了体動詞 *kupić* 「買う」の過去形を不完了体動詞 *czytać* 「読む」の過去形に置き換えると、「私はのんびり本を読んでいた」となる。

(10) 彼らは (／その人たちは) (互いに) 殴り合っていた. 【相互】

Oni bili się nawzajem.
they-NOM hit-3PL.IMPEPST REF mutually

ポーランド語では、動詞は再帰代名詞 *się* が付くだけで相互の意味を持つこともあるが、例文 (10) の場合は、*nawzajem* 「互いに」という副詞を補うことで相互の意味をより明確化している。

(11) その人たちは (みな一緒に) 街へ出発した. 【衆動】

Ci ludzie poszli do miasta.
these-NOM people-NOM go-3PL.PFPST to town-SG.GEN

ポーランド語は衆動に関する特別な動詞形を持っておらず、*razem* 「一緒に」のような副詞などをさらに付け加えることによって衆動を表現することができる。

(12) その映画は泣ける (その映画を見ると泣いてしまう). 【自発】

Ten film powoduje płacz.
that-SG.NOM film-SG.NOM cause-3SG.IMPF.PRS crying-SG.ACC

ポーランド語の場合, 例文 (12) のように「映画」を主語とし, 他動詞を用いて表現するのが一般的である。無生物が主語の他動詞文を避ける傾向にある日本語とは逆に, ポーランド語ではこのような無生物が主語の他動詞文が好まれる傾向にある。

(13a) 私は卵を割った. 【意志／無意志】

Złamałem jajko.
break-1SG.PF.PST egg-SG.ACC

(13b) (うっかり落として) 私はコップを割った (／割ってしまった). 【意志／無意志】

Rozbiłem szklanę.
break-1SG.PF.PST cup-SG.ACC

ポーランド語は, 意志／無意志の対立には無関心であるということが出来る。任意の副詞を用いて偶発的・自発的行為を表現することになる。動詞として「割る」という動作の完了を表現する完了体の形式が用いられている点が (13a) 及び (13b) に共通している。これらの動詞の意味の違いは, この点とは関わりがない。

(14a) きょう私はコーヒーを飲みすぎて (飲みすぎたので) 眠れなかった. 【随意の不可能と不随意の不可能】

Wczoraj wypilem za dużo kawy i nie mogłem spać.
yesterday drink-1SG.PF.PST too-ADV much-QUAN coffee-SG.GEN and-CONJ NEG can-1SG.PST sleep-IMPF.INF

形容詞や副詞を限定する「あまりに」は, 副詞 *za* または *zbyt* で表現することが多い。

(14b) きょう私は仕事がたくさんあって (たくさんあったので) 眠れなかった. 【随意の不可能と不随意の不可能】

Wczoraj miałem dużo pracy i nie mogłem spać.
yesterday have-1SG.IMPF.PST many-QUAN work-SG.GEN and-CONJ NEG can-1SG.PST sleep-IMPF.INF

(14a) (14b) は, どちらにも随意／不随意の区別なく状況可能の形式が用いられていることがわかる。

(15) 私は頭が痛い. 【全体と部分・主体・一時的】

Boli mnie głowa.
hurt-3SG.IMPF.PRS I-ACC head-SG.NOM

ポーランド語は、感覚主体を与格にとり、「頭」を主語にした与格構文によって表現する言語に属する。

(16) あの女性は髪が長い。【全体と部分・主体・恒常的】

Ta kobieta ma długie włosy.
that-SG.NOM woman-SG.NOM have-3SG.IMPF.PRS long-PL.ACC hair-PL.ACC

ポーランド語は「持つ」という動詞によって表現するタイプの言語に属する。つまり「あの女性は長い髪を持っている」という構造が自然である。他方「あの女性の髪は長い」という構造はごくまれである。

(17a) 彼は（別の）彼の肩をたたいた。【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

On stuknął go w ramię.
he-NOM knock-3SG.PF.PST he-ACC on-PPREP shoulder-SG.ACC

(17b) 彼は（別の）彼の手をつかんだ。【全体と部分・対象・接触／結果状態が継続的】

On złapał go za rękę.
he-NOM catch-3SG.PF.PST he-GEN for-PPREP hand-SG.ACC

例文 (17a) 及び (17b) が示すとおり、ポーランド語は対象となる人物全体を直接項とし、身体部位はそれとは切り離して表現する「分割支配型」の言語に属する。

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。【知覚構文】

Widziałem, jak on przychodzi.
see-1SG.IMPF.PST how-CONJN he-NOM come-3SG.IMPF.PRS

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。【知覚構文】

Wiem, że dzisiaj on przyjdzie.
know-1SG.IMPF.PRS that-CONJN today he-NOM come-3SG.PF.PRS

ポーランド語の知覚構文においては、複文的表現が一般的である。なお、ポーランド語では、(18a) の場合には how にあたる語が用いられている。

(19) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。【引用文中の再帰】

On myślał, że wygra.
he-NOM think-3SG.IMPF.PST that-CONJN win-3SG.PF.PRS

ポーランド語では、引用文中の再帰に対しては、再帰代名詞も三人称の代名詞も特にどちらも用いない構造が自然である。動詞の人称変化のみで表現している。再帰代名詞の主格 *sam* を動詞「勝つ」の直前に挿入することも可能だが、その場合「自分（のほう）」ではなく、「(誰の助けもなしに) 独力で」という意味になってしまうであろう。

(20a) 私は (コップの) 水 (の一部) を飲んだ。【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Pilem szklanę wody.
drink-1SG.IMPF.PST cup-SG.ACC water-SG.GEN

(20b) 私は (コップの) 水を全部飲んだ。【部分的に及ぶ動作と全体に及ぶ動作】

Wypiłem szklanę wody.
drink-3SG.PF.PST cup-SG.ACC water-SG.GEN

ポーランド語では、アスペクトの違いが両表現の違いを示すのに重要な役割を果たしている。(20a) のような部分的に及ぶ動作が不完了体の形式で表現され、(20b) のような全体に及ぶ動作が完了体の形式で表現されることは注目に値する。

(21) あの人は肉を食べない。【恒常的な否定文】

Ta osoba nie je mięsa.
that-NOM person.SG.NOM NEG eat-3SG.IMPF.PRS meat-SG.GEN

ポーランド語では、否定文においては一貫して他動詞の動作の対象となる直接目的語が生格 (属格) になるのが特徴である。

(22a) 今日は寒い。【感覚述語・非人称文／感覚主体の存在が感じられない、より客観的な表現】

Dziś jest zimno.
today be-3SG.PRS cold-ADV

(22b) 私は (何だか) 寒い (私には寒く感じる)。【感覚述語・非人称文／斜格主語】

Jest mi zimno.
be-3SG.PRS I-DAT cold-ADV

例文 (22a) 及び (22b) のようなタイプの連辞 *jest* と副詞による感覚や気分をあらわす非人称文のうち、もし (22b) のように主体となるべきものが必要であれば、それは与格で表現される。なお、連辞 *jest* は省略することが可能である。

(23) 私は人がとても多いのに驚いた。【(感情主体が受動的である) 感情述語】

Byłem zaskoczony, że jest tak dużo ludzi.
be-1SG.PST surprise-PF.PASSP that-CONJN be-3SG.PRS so-ADV many-QUAN people-GEN

(23) では、いわゆる英語の I was surprised に相当する表現が用いられている。「人が多い」ということを一つの出来事として捉え、複文によって表現している。ただし、「人の多さが私を驚かせた」のように、対象の方を主語とし、感情主体は対格で表現する方法もポーランド語では一般的である。さらに「人の多さで驚く」のように造格（道具格）で表現することも可能である。

(24) 雨が降ってきた。【現象文・現場での直接体験】

Zaczął padać deszcz.
start-3SG.PF.PST fall-IMPF.INF rain-NOM

ポーランド語では「雨が降り始めた」という表現になっている。また、このような存在（事実確認）文が V+S の語順になるのも、ポーランド語の特徴である。

(25) その本は良く売れる。【中間構文】

Ta książka dobrze się sprzedaje.
that-SG.NOM book-SG.NOM well-ADV REF sell-3SG.IMPF

再帰代名詞 się を用いることにより、他動詞を自動詞化しているポーランド語に典型的な構文である。(1a) や (1d) でも述べたように、再帰代名詞 się は文末を避け、動詞の前に置かれる傾向にある。

略語

ACC=対格, ADV=副詞, DAT=与格, GEN=生格, IMPF=不完了体, INF=不定形, INST=造格, LOC=前置格, NEG=否定, NOM=主格, PASSP=受動分詞, PREP=前置詞, PST=過去, PL=複数, PF=完了体, PRS=現在, QUAN=数量詞, REF=再帰代名詞, SG=単数, 1=1 人称, 2=2 人称, 3=3 人称

参考文献

風間伸次郎 (2012) 「特集 ヴォイスとその周辺 まえがき」東京外国語大学語学研究所『語学研究所論集』第 17 号, pp. 1-22.

執筆者連絡先 : morita@tufs.ac.jp

原稿受理 : 2021 年 12 月 5 日